第一巻第十一号

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子 第一卷第十一號 明治三十八年四月一日發行

社説

現今の女學生——教徒の天職

過去二三年間に勃興したる女子教育が、何等の試煉も障害もなく、坦々たる平地を進行し得べしとは固より豫想せざりし所なりと雖も、近頃起りたる女學生非難の如き、おもしろからぬ批評を招くに至れるは深く遺憾とする所なり。固よりこの非難の一部は假裝的女學生の不行跡なるにも因るべく、また新聞記者中、無責任の針小棒大的の筆法を弄する罪にも由るべしと雖も、直ちに此等を以て、一切の批評を排斥すべき理由とはなす能はず。火の在る所には煙あり。女學生そのものの中に、その姉妹を辱しめ、女子教育を汚すもの、決してこれなしとは謂ひ難し。

然りと雖も、女子教育の過去現在に於て、幾回か來したる蹉躓の眞相を觀察すれば、かの墮落女學生の身の上にも、また憐むべきものあるべく、世の危險と誘惑とに惱みつゝある多數の女子に對しても、深く同情を表すべきものなきを得ず。顧ふに今日女學生の境遇は、深窓の幽閉より深林に放たれたるの觀あり。『女大學』的制裁と思想とを離れて、近世の智識と學藝とを注入せらるゝ彼等は、腦的女性(ブレインローマン)としては圓滿なる發達を遂ぐべしと雖も、その品性の修養に至つては、未だ何等の光明をも與へらるゝを見ず。彼等は家庭と社會とが、女子に向つて要求する舊思想の慣習中に監視せられながら、自由と進歩の生命を皷吹せられたり。即ち彼等は道德に於て、操行に於て、交際に於て、容儀に於て、殆ど氷炭相容れざる兩極勢力の中間に投せられ、衝突の中心となりて、迷路四通の間を行かざるべからざる悲境に陷れり。科學、哲理、文學の如きは毫も彼等にこの必須の光明を示すに足らず、倫理そのものの講究すら、徒らに彼等をして煩悶懊惱の苦を增さしむるにあらずや。彼等は新日本將來の母なりと稱せらる、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

而もこの新日本を産出すべき母その人の理想に至つては、未だ指一本だもつけて敎へらるゝことなし。其理性と情緒とは、盲者に手引せらるゝ盲者のそれの如く、忘念迷想の暗路に馳せて、絶えて新日本女性の眞理想を發見することを得ず。是故に彼等は各自その心に描きたる理想に迷ひ、恰も牧者なき羊群の如く、その路に進みては、また幾多の誘惑に陷らざるを得ず。而して一旦蹉跌するあれば、苛酷なる社會はこれを責むること甚だ急也。敢て墮落者その人を辯護せんとにはあらざれど、一般女學生今日の境遇は、實にかくの如き窮地に在ることを認めざるを得ざる也。

想ふに今日の社會が女學生の進歩發達を希望するの切實なるは祝すべき現象なりと雖も、只徒らに希望し、徒らに批評するに過ぎざるは現下の情態にあらずや。今女學生に對する熱誠の友を求めなば、先づ指を女子敎育家に屈せざるを得ず、而かも彼等は女子の理想を明示し、女子の行路に光明を與ふるものにあらず。彼等は宗敎を離れたる倫理によりて、新舊思想衝突の實生涯に調和と指導とを與へんとして、却て失敗しつゝあるにあらずや。

是故に今日の女子は、自ら救ふにあらずんば、また遂に彼等を救ふ者なし、女子若し自ら品性の崇高と、人生の光明とを求むるなくんば他にその道なきを奈何せん。若し夫れ高傑なる品性と淸淨なる生涯を以て、自ら辱しめざる女子と雖も、その姉妹が自ら沈淪し、或は世に非難せられつゝある今日に於て、おのれは何等の責任なしといふことを得んや。『一の肢若し苦まば諸の肢ともに苦み、一の肢たふとばれなば諸の肢ともに喜ぶ』べきは、これ人生の至情にあらずや。

あゝ基督敎徒たる女學生諸君よ、今や我輩が感發一番すべきの秋は來れり。我等は團結を鞏固にし、同情を眞率にし、互に相勵し相戒めて、共に理想の實現者たらんことを勉むべきにあらずや。『爾曹互に鹽を以て味つくべし』――鹽なるかな、鹽なるかな。我等の責任と天職とは實に玆にありて存す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

聖書研究

第十七週第四日（馬可十〇廿三―廿七）

富貴

エー、オルトマンス

この一段はイエスが弟子等に與へ給へる實際的敎訓なり。『神の國に入る』とは、神の恩寵を樂み、神の聖旨を爲すの謂にして、この二者は常に相伴うて進むべきもの也。富者が神國に入るの難きは、單にその資産を有するが故にあらず、その資産に信賴するを以て也（第二十四節）。イエスがかの富める靑年の宰に仰せ給ひしは、その資産を卑むべしとにはあらで、これを主の支配に任せよとの意也。我等若し心身共に主に屬するものとせば、その財産もまた同じくこれに屬するは勿論のこと也。この理をわきまへて、よくこれを實際に行ふことは、イエスに從はんと欲するもの、極めて難しとする所也。只これをして容易ならしむるの道は、自ら神と共にありて、神の立場よりすべての事物を觀察するに在り。イエスは第二十七節に於て明かにこの道を示し給へり。原書によりてその意を考ふるに、人は獨力にて爲し得ざることも、神と共にあらば、よくこれを完うし得べしとなり。また馬太傳第十章第廿二節馬可傳第九章第廿三節などを見れば、いよ〳〵その言のまことなるを知る。然り、我等が全く神と一致合體するは、これ限りなき力を得る基にして、神國に入らんと欲する富者の宜しくとるべき道なりと知るべし。彼にしてわが身とその富とを主のみ手に任せなば、その富は決して神國に入る妨となることなく、却つて多くの助けを與へ、有益の用を爲すべし。

講演

祈禱の力

エス、デー、ゴルドン

近頃ムーデー氏の經驗によりて、祈禱の力の著しき

適例を發見するを得たり。これ彼が世に類なき世界的傳道の成功を説明するものにして、世未だ多くこれに關して語るものなきは、怪しむべきの極みにあらずや。我等はこの一事が、人々の信仰を鼓舞作興するの功、決して尠少ならざるを信ずるもの也。

ムーデー氏曰く、『ある土曜日の晝頃、予はテームス河畔のエクセター、ホールに開かれたる集會に赴きしに、何人も隨意に壇上に立つことを得べしとのことなりければ、予もおのれの欲する儘、少しく語る處ありき。而して演じ終るや、予の傍に來りて挨拶する人々の中に、一牧師あり、に請うて曰く、明日朝夕二回、おのれの教會に來りて説教しくれよと。予はこれを諾して別れぬ。かくて翌朝その約に從つて禮拜に赴きしに、大なる會堂は既に聽衆を以て充滿しゐたり。定刻予は説教を始めぬ。されどこの時の如く、はなしにくき機會に接したることなし。聽衆は恰も土偶の列れるが如く、その顏を見るに、予が語る處に對して、更に感觸せるさまもなし。されば予は何故かゝる壇上に立ちしか、またその夕再び説教せんなど約せざらましかばと思ひしかど、今更せん方もあらざりき。』

『夕の禮拜にも、朝の如く、聽衆堂に滿ちて、彼等はいかにも予が説教に傾聽せるが如くなりしかど、更に趣味感觸を惹起せるさまもなく、はなしにくきこと朝の説教に異ならず。かくて語ることその半に到れる頃、滿場何となく色めき來れるを見る。そのさま、恰も天來の靈氣颯として到り、堂内の光景を一變せしめたるが如し。是に於て、予心大に喜び、説教を終るや、直ちに聽衆に向ひ、信者たることを欲するものは起立すべしと告げしに、その數豫期に反して極めて多かりき。これ予が一驚を喫したる所也。依て予は直ちに牧師に向つて曰く、こは何事ぞや。牧師答へて曰く、われも解することを得ずと。依て或は彼等が予の言を誤解せしならんと察し、予は更に彼等に向つて、この禮拜の後、別室に於て求道者のために、更に集會を催すべきを説明して壇を下りぬ。』

然るに求道者の別室に集るもの、其數實に夥しく、

全く立錐の地なきに至れり。ムーデー氏は再び聽衆に向つて數分間の講話を試みたる後、信者たらんことを希望するものは起立せよと告げたるに、其數擧げて算すべからず。氏はまた牧師に向つて、これ何事ぞやと問ふ。牧師答ふるに前言を以てす。かつ曰く、かゝる多數の求道者を得て、予はいかにこれを處置すべきや、その爲す所に迷ふと。ムーデー氏曰く、明晩及び火曜の夕、更に集會を催してその成行を見ては如何、予はやがてダブリンに向け出發せざるべからずと。

かくて氏は既に出發して、やがて舟に乘らんとする頃、牧師の飛電に接せり。曰く、『すぐ歸れ、會堂滿員』。依て氏はまた引返して、滯留すること十日。その結果としてこの教會に四百人の信者を加へ、かつその附近の教會に對しても、尠からぬ刺戟を與へたりといふ。後氏は當時のさまを追懷し、自ら頭を垂れて曰く、その時、予はこの教會以外に何等の計畫をも有せざりきと。

さてこの日曜日を始として、その後十數日間に於ける傳道は、何を以てかく驚くべき良果を收め得たりや。ムーデー氏は固より神の選び給へる一偉人たるに相違なしと雖も、以上の成績を以て、單にこれを氏一人の功に歸するは、これ皮相の見といはざるべからず。而してまたこれが牧師の力にもあらざることは、彼等が事の意外に出でたるを見て、等しく相驚きしによりても知らるべし。然り、かゝる良果を得るに至れるは、更に他に原因の伏在せるものなくんばあるべからず。ムーデー氏の眼光はいちはやくもこれを發見することを得たり。

氏は間もなく左の一事實を耳にせり。この教會に屬する一婦人ありしが、いつの頃よりか病に罹りて、容態漸く重し。醫士これを診して曰く、覺束なしとは見ゆれど、尚ほ數年間は生命を保つべしと。病者は幾久しくこの儘苦むべしとは何事ぞ、つく／＼おのが一生を顧みれば、これまで神のために盡したる處幾何もなし。然り一事もなし、而して今かく病床にありては、遂に何をも爲すこと能はずなど悔みける末、自ら謂ら

く、『われは祈ることを得べし』と。それより病者はおのが教會のために祈れり。この婦人に、一人の妹ありて同じ家に住み、同じ教會に屬す。されば彼女は、この病者と外界とに於ける唯一の連鎖となりぬ。日曜ごとに、妹が朝の禮拜を終りて歸り來るや姉はいつもこれに向つて

『けふは何か教會に珍しい事でもあつたの？』

妹はまたいつもこれに答ふるに

『いや何にも……』

而して姉はまた水曜日に至りて、妹が祈禱會より歸るを待ち

『今晩はどうでした、屹度何かちがつた事があつたでせう』

『いや何にもないの、例の牧師が例の如き祈禱だけよ』

其後ある日曜日の晝、妹は教會より歸りて

『姉さん、今日說教した人、誰とお思ひです』

『誰でしたらうね』

『あのムーデーとかいつてね、米國から來た人なの』

姉はこれを聞いて、瘦顏忽ち蒼白く、眼には驚愕の色を示し、唇さへふるはせながら、

『私はよくその譯を知つてます、いまに教會の內に何か起るでせう。けふは晝飯は運んで來てくれなくとも好い、私は祈禱をしてこの午後を過ごしたいから』

姉はその言の如く、熱心に祈り續けぬ。見よ、前に述べし通、この教會にかの驚くべき奇蹟を呈せしは、實に當夜のことにてありき。

ムーデー氏は婦人をその病室に尋ねいだして、これを見舞ひしに、婦人は氏に向つて、今より殆んど二年前、氏の講話を揭げたる一冊子を得、これを讀みていたく感激し、爾後倫敦に於けるおのが教會のために、神が氏を送り給はんことを祈りゐたりきと告ぐ。然り、婦人の祈禱は只これに過ぎざりき。

月過ぎ、年逝きても、婦人は未だその祈禱を廢せざりき。而してこれを知るものは、只神とおのれとのみ。かくして祈りに祈りけれど、何の應驗もなし。而かも未だ撓ます。あゝ、かばかり熱烈ある祈禱の、いかでそ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の目的を達せざるを得んや。然り、赤心より出づる祈禱は、必ずその應驗を見ざるはなし、宜なるかな、神の靈はムーデー氏の心を動かし、海を越えて英國に赴き、倫敦に到り、遂にかの婦人の屬する教會に於て、その働きを爲さしめ給ひぬ。知るべし、水磨を轉ずる源は、山間幽僻の裡より出づることを。

ムーデー氏の如きは、世に稀なる宗教的偉人にして、彼の事業を助けたる人々もその幾千百なるを知らず。而かも尙ほこれらの人々の背後に於て、かの婦人がひそかに献げし祈禱の如きは、また等しく尊重せらるべきものにあらずや。

われはムーデー氏の名を知れり、されど婦人の何人なるかを知らず、われは氏と共に働きし幾多の傳道者を知れり、されど密室に籠りて、氏のために祈りし婦人の、果して誰なりしかを知らず。あゝこれ實に隱れたる事業にあらずや。彼等の中、果して何れを偉人と稱すべきか、我等これを知らず。あはれ、この無名の一婦人は倫敦の北端に住みて、今尙ほ祈禱の生涯を送りつゝありといふ。我等は祈るべきか、將た祈らざるべきか。われ等にとりて必要なるもの、世に祈禱の如きはあらず、何事を措いても、我等は先づ神と交ることを知るべき也。

家政

運動

むかし希臘に於ては、靑年教育の中、大に體育を重んじければ、學校は悉く一個の體操場として世に知らるゝに至りぬ。同國教育の旨趣は、身體と精神とをしてよく健全なる發達を遂げしめんとするにありしが如し。而してこの教育法の功果の大なるや、彼等が知識上及び身體上の發達に於て、今尙ほ世人の鑑と認めらるゝによりても、これを證することを得べし。されど後年に至つて、人はその精神と身體とを一様に鍛錬することを得ずとの論漸く勢力を得て、遂に體育を輕ん

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ずるに至りぬ。

三十年前、米國に於て出版したる一教科書を見るに、左の記事あり、曰く、『わが國の諸學校及び諸大學に於ては、從來體育は殆んど敎育の一部と認められざりしかど、その後わづかの實驗を經て、いよ〳〵その利益の大なるを認識するに至れり』と。我等は現今多くの學校に於て體育を課するを見て、その極めて大切なる所以を知る。然るに世の靑年女子にして、身體が日々その食物を要する如く、また日々運動を要することを會得せるものゝ少きは、げに遺憾の極みにあらずや。

われ曾て一學塾に入れる時、成規の體操科以外に、每日多少の運動を爲すことを怠りて嚴格なる譴責を受けたることあるを記臆す。この僅々一年間に於ける經驗は、爾來幾多の境遇に處して、未だ曾て忘るゝこと能はざる所なり。

されど秩序的運動を爲すに、かゝる外部の强迫なくとも、よくこれを完うし得べき道なきにあらず。即ち運動の必要なることを堅確に認めて、おのが體力の許す限り、よくこれを實行するの決心これ也。

日本に於ては、おのが足の枯腐するまでも、久しく端坐したる達磨の如き人々の、極めて尠からざるを見る。活動はすべての動物の法則也。いかなる機關も、最もよくその効果を收めんと欲せば、先づこれを使用せざるべからず。今試みにピヤノを彈せんに、十年以前に比して、その技の却つて劣れるものあるは何故ぞや。これその手指と手頸とが、平常の練習を缺ぎて、力を失へるがためのみ。それ運動の目的は、身體の各部をして均一なる、若くは相當なる發達を遂げしめ、常に體力の困憊消耗を補充するに在り。

平常の職務のために使用すること最も少き身體の部分を運動せしむるは極めてよき方法也。然らば最も愉快に、かつおもしろき運動を爲すことを得ん。運動は、恰も貯蓄銀行に金錢を托するが如きものなれば、極めて眞面目にこれを考へ、かつかしこき方法を講ぜざるべからず。ひろ〳〵したる所にいでゝ、一心不亂に勇しく運動するは、胸懷を大にし、疲れたる神經を回復

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

して將來よく健康を保ち、かつ生命を長くする所以也。

史傳

ハヴーゴール女史

ユー、シー、ダブリュー

今こゝにこの才識世にまれなる閨秀作家の小傳を紹介せんと欲す。

女史は千八百三十六年、英國の西部、秀靈なる山間に生る。幼にして穎悟、三四歳の時、既に聖書その他平易なる書籍を讀むことを得。

僅に十二歳にして母を失ひければ、つぶさに孤獨悲哀の苦味を嘗む。夙におのれの救主を求めけれど、性質內氣にして、他人に向つておのれの心情を語らざりければ、いかにして、またいづこにその救主を得べきやを知ること能はず、悶々として月日を送りぬ。

學校に在りける頃、同窓學生の間に、信仰の一大覺醒起りて、女史の最も親しめる友の如き、その際基督を信じて、大に安心立命の地を得たり、されど女史に於ては、尙はそのめぐみに與ることを得ざりき。その後間もなく一友人來りて、靜に女史に告げて曰く、

『何故あなたは基督に一身を任せることが出來ませんか、今基督がかゞやく雲に乘つてこの世に下り、贖ひし人々を伴ひたまふといたしませう、それでもあなたは獨り後にのこされて信じないでゐらつしやいますか、主の約束を信ずるに足らないものと考へてゐらつしやいますか、おのれの靈魂を主に任せることが出來ないのですか』

これを聞ける女史の心には、一道の光明輝き來りて、感激措く能はず、則ち答へて曰く

『今たしかに基督を信じます』

かくて女史は、獨りおのれの室に入りて跪き、遂に平和歡喜の境に到達するを得。今や聖書は女史にとりて限りなき慰籍の友となりぬ。されど神の恩寵の豐かなるを悟るには、尙は幾年の久しきを經たり。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女史は記臆力極めて強くして、聖書の大部分を暗記せりといふ。また音樂の技に長じ、自ら作れる歌曲甚だ多し。この技能は、女史がその一生を通じて、全く基督のために献げたるもの也。

『わが聲をもて
　とこしへに
王（きみ）がためにのみ
　歌はなん』

女史がその手簡の一に、

『我等はすべての事物を牲（にへ）にして、おのれの愛することのはもて歌ひ、仰いで主のはゝゑみ給ふを拜したく候。我等の歌は、主のみ力の伴はぬ人の美しき聲に勝れて、多くの人の心に響くべしと信じ候。さきつ頃、私は倫敦の大會に赴きて、主のために歌ひ候處、滿場水をうちたる如く、靜に聞きくれ申候。』

女史はまた極めて勤勉家にして、かしこくおのれの時間を用ゐ、佛蘭西、獨逸、羅甸、希伯來、希臘の諸國語を學ぶを得たり。ある時人に書きおくりて曰く、

『私は一生涯の間、最善の力を盡して、おのが事業を成したく存候。おゝ、希ふ處は、主が私を潔めて、雪の如く清くなし給はんことに候』

而して女史が一生涯の祈禱は、主が女史のために備へ給ふ如く、おのれも主の賜をうくるに足るべき備へをなすの一事なりき。

女子基督敎青年會に加はりてより以來、女史は全力を盡して同會の事業を助けたり。かのうるはしき讃美歌の一曲『ツルー、ハーテッド、ホール、ハーテッド』の如き、女史が新年同會のためにものしたるもの也。女史が如何にしてその多くの讃美歌を作りたるか、請ふ女史をして自らこれを語らしめよ。

「神がかくわが歌を祝福して、よくこれを用ゐ給ふこと、今更驚くの外なし。げに筆とることは、われに於ては一種の祈禱なり。一句の微といへども、われはおのれ心をもてこれを作爲せず。苟も手を下せば、われは自ら少兒の如くなることを覺ゆ。見よ、少兒の文を遣るや、一章毎にうち仰ぎて曰く、「それから何

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

とかきませうか」。われに於ても亦たかくの如し。』

唯それかくの如くなるを以て、女史が精神上に於ける經驗は、直ちに移して以て、萬人の胸奥に反響せざるを得ざる也。

女史は約翰第一書一章七節に於ける『イエス、キリストの血すべて罪より我儕を潔む』の語を味ひて、深く神の恩寵の大なるを感じ、すべて基督と共にあるものは、その限なき力によりて潔められ、かつ助けらるることを悟れりと。女史曰く、

『全き恩寵を受けんと欲せば、これに先ちて全き服從を表せざるべからず。基督の血、すべて罪より我等を潔むるものなることを知りて、われは初めてこの身を主に任することを得たり。げに主と結ぶ親交の如きは、これを他に求めんとするも、また決して得べからず。われはすべての人が、この邊の妙味を捕捉し得て、主がこの上、おのれに與へ給ふみめぐみいかにと、日毎に待ちのぞむが如き境涯に進まんことを望む。人生はかくの如くにして、初めて光榮を保つべき也。

女史は身體虚弱なりしかば、烈しき病魔に襲はれては、天門ひらけて、また女史を迎ふるなるかと思はれしこと、その幾回なるを知らず。されば瑞西に赴き、山水明媚の間に痾を養ふこと一再に止まらず。かゝる羇旅の裡にありても、女史はよく基督の證者となりて、人々を主に導くことを勉めたり。

女史は朝早く起きいでゝ、早く勉強することを生涯の掟となし、夜深く事を執るが如きは、斷然自ら禁じたり。その性情の端嚴にして爽快に、頴敏にして豁達なる處、著しくその行爲の上に表はるゝを見る。

女史が絶えず研究を怠らざりしものは聖書にして、これを以て一大慰樂となせしことは、同書の餘白に夥しくかき込みたる文字あるを見ても知らるべし。女史はよく聖書の秩序的組織的研究を他人に勸めしが、その手簡の一にも左の言あり、

『先づ「聖書の友」に御加はりなさるべく候。かくして初めて新しき力とめぐみを得たまふべく候、我等は

みな悉く、斷えず聖書を讀むべき筈に候』

女史が女子基督教青年會に向つて送りし最後の書を見るに

『げに神の約束はまことにして、主イエスは我等がたしかに賴るべき柱に候。私は皆々さまが極めて爽快なることばをもてイエスに就いて語り給ふことを希望いたし候。私はいまイエスがこの魂を伴ひ給ふことを相待ち居候』

また曰く

『私は天津國にて、再びすべての友に接したく候。何卒待つわれを失望せしめ給ふなかれ。會員諸君へ幾久しくイエスにより賴み給ふやう御傳へ下されたく候』

かくて女史は力なき、しかもほがらかなる聲もて、おのがものし、讃美歌の一曲をうたひ、いよ〳〵その命の絶えんとするを見るや、

『わが事終りぬ。めぐみある平安（やすき）！』

といひつゝ、遂に永遠の佳郷に逝きぬ。これ實に千八百七十九年六月三日なりき。

遺著頗る多し、而してこれらは二十年後の今日に於ても、尚ほよく世人に愛誦せらる。これ蓋し女史がこれらの書に於て、とこしへに存在するイエス、キリストをのみ祖述せしに因らずんばあらず。

（女史が永眠の際に歌ひし作は、本號英語欄内に掲げたれば、就いて見るべし）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

which enables her to see things in their true proportion. She does not allow herself to be narrowed to one line of activities, but gives to each department of life that amount of time and attention which will yield the best results in the development of Christian womanhood.

She realizes that during those charmed years, she has the greatest opportunity of her life for consecutive, hard study; that she must with diligence lay the foundation for all future intellectual growth. She knows too, that in order to make her mind most active, she must guard well her health, and she makes it a never neglected duty, to exercise and give both mind and body the recreation they need.

But I am sure she knows that God teaches the lessons of life more through people than through books, and she will gladly give herself to human friendships. In her relations with others helping and receiving help will be so mingled that the two elements can not be distinguished. From association with her teachers she will gain the rich results of mature experience. Perhaps she may give to them a new glimpse of the cheery hopefulness of youth, kindling anew their own ideals. To the homesick and lonely schoolmate she will give sympathy, to the girl of low ideals, the inspiration of her own noble ambitions, to the one whose will is weak, she will bring courage, and from this very giving of herself will came the constant spiritual growth which is the indispensable crown of a truly educated woman.

In all these relations she will be humble before God, realizing that the life that now is, is a preparation for that which is to come and that the guidance of the Heavenly Father is needed if she would make the most of her life. From the morning hour spent in reading God's word, till the close of each day, she will be kept by Him true to her ideal of Christian helpfulness to make her life as a student count for good in the lives of her friends. Not frivolous, but happy in the joy of the Lord, not ever-intent upon books, but seeking the knowledge that shall not vanish away, not selfish in her friendships, but eager to give of her wealth of love; not counting herself to have attained, but inspiring others to join her in her growth to the perfect womanhood—"into the measure of the stature of the fullness of Christ."

Spending thus the four years of college life, the girl, now a woman grown, can look back upon the dear days as a time both of growth and of helpfulness, of spending herself for others and finding even in this present life the rich reward of Christian service.

Mary Ward Phelps.

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Muriel was awed. After all, it was with Him whether it ran smoothly singing, or waited in quietness and confidence for this word, or flowed on to the honored grinding. Its times lay in His hand; might not hers be in such keeping?

This was not the end of the battle. No; it was but the beginning, with victory assured to the right. The illuminating thought of the wee river harnessed down for its work did not change the facts. The two months were eight weeks long; the pain was to be borne; the golden school days slipped away; the little bank account vanished—all before Muriel might go on. But through the waiting the little river's song stayed with her like a sure helping hand. She found fine nature stories to be learned that she, a city child, would have for all time missed except for the quiet wait. Best of all, she found opportunity to practice the patience and sweetness of submission, to show forth the praises of Him who hath called us out of darkness into His marvelous light.

And what happened then? No fairy godmother nor philanthropist dropped a fortune into Muriel's lap that made smooth her path through college. No; like most people with definite ambitions, she found that she must work patiently on if she would win. It did not even occur to her to consider herself ill-treated, when the fairy failed to appear. She even thought finally of the two months at the wait of the river as well worth the cost of their pain and labor. For the song had found a note that was more than gaiety—and that song was to stay for all time.—*Christian Observer.*

THE COLLEGE GIRL AT HER BEST.

To the young girl, for the first time away from the restraints and calm wisdom of home training, the many phases of college life present themselves with almost bewildering rapidity. As she meets new friends with varying interests each day seems to bring a fresh ideal. The ambition which yesterday seemed all-sufficient is today cast aside and obscured by the beauty of some new possibility. With such rapid changes going on in the mind of a girl, it is no wonder that during the first weeks or even the first year in college, life becomes feverish in the endeavor to keep adjusted to the constantly changing ideals.

If, then, we wish to picture the college girl at her best, we will choose as an example, one who has passed through this period of changing ideals and who has come to the point where with youthful enthusiasm unimpaired, she can give to each phase of college life that attention which it deserves. The college girl at her best has a wideness of vision

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

to try to lift herself to become actively conscious of the pain that made her back feel broken across with lines of anguish. But "two months"—"absolute rest"—"no anxiety"—! The words still sounded in the room and joined the whirl of excited thought jumbled through her brain broken by bits of nonsense verse, sayings of the masters, lilts of song.

One of these last, with monotonous reiterance, told itself over and over. The children on the circle had been singing it the week before, and at first it brought back to Muriel only the bright ring of faces, the quickly flashing hands as the clear little voices rippled out the words. She caught again the mischievous flash of a fellow student's eye that added a personal meaning as the children sang.

"A merry iittle river went singing
day by day."

Muriel groaned aloud as the scene spread itself before her. The will that had borne up firm and bright through two years of struggle that had kept clear its purpose and laughed at obstacles, that had bowed only to its true Master, was ready to give up the fight.

The song repeated itself with mechanical persistence. Imperceptibly, the soothing sameness quieted the brain as it instinctively fitted the words together. And again and again.

"A merry little river went singing
day by day
Until it found a milldam that
stretched across its way;
And there it spread its waters a
quiet while to wait,
Until the busy miller should lift
the water-gate."

Absently Muriel's mind followed the meaning; unconsciously it sought out the hidden possibilities of the little song. Mockingly the words came singing back; monotonously—"until it found a milldam that stretched across its way"—but—what is the difference now? The words came tinged with light.

Muriel fairly drank in their sacred significance. Why it was life—her life. Certainly it had gone singing day by day. And now—yes, these two endless months stretched straight across the pathway forcing her into dead, useless waiting. But what said the song? How about the little river? It had waited. Quietly; yes. But idly? Its time dead and useless? The bit river might at least spend itself gathering the forces of its energy for the Master Miller's use when he opened the great gates out into channels of further usefulness. She all but pitied the gay little river when it found the high dam that so sharply euded the singing. But then, the wheels could b turned only by just such water, handled in just such fashion.

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Her reason told her that the sacrifice had to be made. Long tried principle told her that the disappointment must be borne. She knew that she would come to her right mind to-morrow or the next day or the next, and accept and carry her burden. But for to-day she had surrendered to the rare luxury of being as miserable as she felt. So she turned away from the sunshine and let sweep over her the whole tide of disappointment and anger and rebellion.

Two months! The doctor had just set that as the minimum of time. Six weeks on the bed and two or three more to regain strength. Time so precious, too. And the money! In quick flashes her mind calculated it. Two months of doctor's bills, of board, of medicine. The total stared her in the face side by side with her bank account. There was no possible way out now. It simply meant laying aside indefinitely her life plans that lacked only a few days and a few dollars of fulfillment. No wonder if her heart surged with rebellion.

The bank account now slipping away so fast meant two years of hard work; had been gathered together by many small sacrifices. Not a dime but could tell its story of brave economy; not a dollar but had been laid away stamped with renunciation. And then at last, fair before her, lay the course of study that was to open to her the life-work for which she felt herself fitted. Her ideal had grown a reality.

All that was the Fall before.

Quietly enough Muriel had slipped into her place in the great kindergarten college, She worked with the pure eagerness of one who has given much and waited long for the chance to work. She had allowed herself little time for relaxation, but it had come of itself to her sunny nature, bringing with it dear and congenial friends, other girls of every grade of wealth and poverty, but each working earnestly toward her high ideal. And her sweetness and bubbling gaiety had gained for her that envied place of sunshine scatterer which had made "Muriel Rivers" seem scarcely so appropriate as her more popular name of "Merry Rivers."

That was just how things stood four days before. With work and joy and health at their height; with funds that were fast becoming slim, indeed, but were still sufficient, Muriel had stolen away just for a day's rest in a nearby mountain village. Then had come the unlucky slip bringing so much pain in its wake that even now she knew only dimly how it had all happened.

But that it was all true enough was beyond doubt. She had only

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

5

Half-hearted, *false*-hearted! Heed we the warning!
Only the whole can be perfectly true;
Bring the whole offering, all timid thought scorning,
True-hearted only if whole-hearted too.

6

Half-hearted! Saviour, shall aught be withholden,
Giving thee part, who hast given us all?
Blessings out-pouring, and promises golden
Pledging, with never reserve or recall.

7

Half-hearted! Master, shall any who know thee
Grudge thee their lives, who hast laid down thine own?
Nay; we would offer the hearts that we owe thee,—
Live for thy love and thy glory alone.

8

Sisters, dear sisters, the call is resounding,
Will ye not echo the silver refrain,
Mighty and sweet, and in gladness abounding,—
'True-hearted, whole hearted!' ringing again?

9

Jesus is within us, his rest is before us,
Brightly his standard is waving above.
Sisters dear Sisters, in gathering chorus,
Peal out the watchword of courage and love! F. R. H.

AT THE WAIT OF THE RIVER.

Muriel turned her face to the wall to hide the sunshine from her eyes lest it find its way through her heart—her heart that was so bitter that the bright day looked but black and the pleasant country sounds were discord. The bee that came blundering in at the window filled her with resentment. The slashslash of the churn out in the kitchen made her ache with weariness. She found herself waiting with intense anxiety for the next call of the katydids as they answered one another with rythmic precision. The voices of the children at play in the yard cut her nerves through and through and added themselves to the medley that flashed and whirled in her brain.

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

Young Women of Japan

Vol. I April, 1905 No. II

TRUE HEARTED, WHOLE HEARTED.

Written for the Young Women's Christian Association by Frances Ridley Havergal.

I

True-Hearted, whole-hearted, faithful and loyal,
King of our lives, by thy grace we will be!
Under thy standard, exalted and royal,
Strong in thy strength, we will battle for thee!

CHORUS——

Peal out the watchword and silence it never,
Song of our spirits, rejoicing and free!
True-hearted, whole-hearted, now and for ever,
King of our lives, by thy grace we will be!'

2

True-hearted whole-hearted! Fullest allegiance
Yielding henceforth to our glorious King;
Valiant endeavor and loving obedience
Freely and joyously now would we bring.

3

True-hearted! Saviour, thou knowest our story;
Weak are the hearts that we lay at thy feet,
Sinful and treacherous! yet, for thy glory,
Heal them, and cleanse them from sin and deceit.

4

Whole-hearted! Saviour, beloved and glorious,
Take thy great power, and reign thou alone,
Over our wills and affections victorious,
Freely surrendered, and wholly thine own.

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA